特251
556

歌の本道

古溪小篇　第四

古溪歌會

339
266

始

特251
556

歌の本道

目次

一、詩の味歌の味
二、歌の本道
三、歌の嚴肅性

發行所寄贈本

凡例

一、これは歌の根本論である。作法に關することは、すべて割愛した。頁が殖えるから。

一、要は思想の撰擇、排列、加除潤飾をうまくやればよいので、明晰で、優美で、力强くあらんことを欲する。

一、言語と思想とを、無關係ならしめ、分離せしめようとしてゐる人があるが、それは、日本語を滅し、日本精神を亡すにすぎない。

一、漢文、漢字、漢學、佛教と日本語、日本精神との交渉關係をよく考へて、日本語の獨立的發達を早く立派にさせたいものである。

一、歌の根本論について、「わが歌」を取つて、兎や角いはれることは、差控へてもらひたい。私は從來、今日でも、この理想に至らうと多少骨を折つてをるにすぎぬのである。私の歌が理想的發達を遂げてゐるとは、毛頭考へてゐないのである。

歌の本道

一、詩の味　歌の味

詩とは何ぞ、歌とは何ぞ。——詩趣、歌趣。——短册の話、時賴の偈、信玄の詩。——詩歌の本道。——漢詩と和歌。——讀詩法。——詩の本義。——七言絶句數首。——短歌數首。

歌の木は　いまだ茂らず　藪原の　草の茂りに　土やせにつつ。

日本には歌の木はまだ茂つたことがない。歌の木に似た灌木だか雜草だかはある。本當の歌の木の、花も、實も、味も、これからさきのことである。

「詩歌」といふ字は、支那傳來である。「うた」といふ日本語は無論日本出來でせう。詩は昔は「からうた」、今は「漢詩」といふ。西洋の「ポエヤマ」を「詩」と譯したのは、まづ、まち

がひ。

詩歌といふものは、雜草ではない。貝細工の玩具ではない。ことばと思想とを材料にした藝術で、音樂を必ず伴ふ。時には劇的要素をも伴ふ。「詩を書く」といふ人もゐるが、眼で見るだけのものは詩ではない。歌はないもの、即ち音樂的要素の缺けてゐるものは、歌ではない。只見るだけの御馳走なら、ままごとです。

詩歌の形は、支那でも、日本でも色々あるが今は、三十一字の短歌と、二十八字の七言絶句の漢詩とについて少し御話する。但し詩歌は、三十一字廿八字だけですむと思つてはいかん。字數さへあればよいのではない。その內容が充實してゐなければならぬ。

詩の味、歌の味、さう雜作なくいひ得るものでない。少し實地にやつて見ると、多少づつ次第に分つてゆく。それには智慧、學問、讀書がいる。修行がいる。

詩歌といふ藝術は、必ず民族、國家、鄕土、國民思想、民族精神、即ち信仰、歷史、文明、道德、哲學等を背景としてそだつものである。まづこれを忘れてはならぬ。藝術に國境なしといふのは、その流行の上からいふので、こしらへる—創作の—上からではない。

詩歌は、形だけ整へばよいのではない。卅一字相違無之候也ではいかん。形と內容・思想とを切離してはいかん。形式と內容と合致し、色と、かをりと、音樂と、調子と、個性と、民族的思想背景と、美しさ、强さ、ほどよさ、品のよさと、これらのものが、十分工合よく調和され、滿足に熟して（みが、いつて）ゐなければいかん。これが詩趣、風韻、神韻である。形が似てゐるからとて、伊豫蜜柑とボンカンとを一緒にしては困る。

私の處へ、「日本武尊の御直筆の短冊」、「仁德天皇の御宸筆の短冊」といふものを持つて來たものがある。拜見すると、日本武尊の御短冊には、例の、「新治つくばをすぎて、幾夜かねつる、かかなへて、夜には九夜、日には十日を」が書いてある。その下の方のわきに小さく、「日本武尊」と御署名していらつしやる。仁德天皇のを拜見すると、「高き屋にのぼりて見れば煙たつ民のかまどはにぎはひにけり」である。下に「仁德天皇」とある。成る程、此の上もなく尊いものであると感心した。足利期以後の發達である短冊へ、千年も前のお方が御直筆で御署名、しかもおかくれになられて後、四百年もたつてから奉つた御諡號を御親しく御宸書なさる。何とも涙がこぼれるだけである。

お釋迦様の實印といふ話も聞いた。かなり大型な四角なものださうだ。先祖傳來の寶物といふので、東京へ賣りに來たのである。支那や日本には印、實印、認印、雅印だ、游印だと發達使用されてゐるが、外の國には、無いものである。

北條時頼の辭世の偈といふのがある。時頼は偉大な政治家の一人で、禪の信者で、有名な栂尾上人から、「身直ければ影直し」といふ教を聞いて悟つた人だ。愈々死ぬるといふ時に、辭世を詠まれた。「業鏡、高く懸る三十七年。鐵槌、破碎す、大道湛然」。實に、立派なものである。「世にあること三十七年、なしたる善業惡業は鏡に映つて、明明白白である。（煩惱の業かも知れぬ）。が、その鏡も鐵槌で破り碎いてしまふ。今、身の終りになつた。大道は湛然としづかに空である」と、禪の悟りの意味をいつたのであらう。

處が、趙宋の無果和尚といふ人の「無文印」といふ本に出てあることによると、先輩、笑翁禪師の作として、

業鏡高懸　七十二年　一椎擊碎　大道湛然

とある。一代七十二年間自分のした事は善でも惡でも、明明白白、鏡の如くである。その有形の鏡を擊ち碎いてしまつたので、モトの無形の大道（空）に歸一して湛然と靜かにみちたたへてあるといふのだらう。七十二年であるから、業鏡高懸にひびくのである。三十七年では高懸にはなるまいが。支那の坊主が、こすいのだらう。

武田信玄といふ武將がある。信玄公といはなければ、甲州では撲られる。此の信玄公の作られた漢詩に、七言絶句で「鏖殺す江南十萬の兵。腰間の一劍、血なほ腥し。野僧は知らず、山川の主なることを、我に向つて殷懃に姓名を問ふ」といふのがある。豪壯痛快、いかにも信玄公らしい。處が、明の郎仁寶といふ人の『七修類藁』といふ隨筆集の中には、明の太祖朱元璋の詩として、

鏖殺江南百萬兵。腰間寶劍血尚腥。山僧不識英雄漢。只恁嘵嘵問姓名

とある。成る程、「江南十萬兵」も、日本では考へられもせず、「山川主」も隨分言ひすぎてゐる。が、英雄、人を欺くこと、此の如くである。

さても、餘談が長かつた。大體、右の様な有様が、日本人の詩歌に對する考方ではなからうか。見當がちがつてをる。此の見當のちがつてる考で、和歌を尊崇し鑑賞しようといふのだか

ら、たまらんです。漢詩を考へようといふのだから、たまらぬです。いや、詩の味、歌の味が、わかるはずが無いのです。本當の鑑賞が出來ないから、何かの道具に流用しようとするのだ。半ば馬鹿にしながら半ば玩具にしようといふのです。まちがひ、まちがひ。

支那の、唐といふ時代の詩人、李太白の集には、「哭晁卿衡」と題して、日本の安倍仲麿の死を悲んでをる。

日本の晁卿、帝都を辭す。征帆、一片、蓬壺を遶る。明月歸らず碧海に沈み、白雲、秋色、蒼梧に滿つ。

日本晁卿辭帝都。征帆一片遶蓬壺。明月不歸沈碧海。白雲秋色滿蒼梧。（李太白集）

とある。此の、唐の玄宗皇帝の秘書監までやつた安倍仲麻呂が、明州で難破して、月を見てよんだといふ

天の原　ふりさけ見れば　春日なる　三笠の山に　出でし月かも

といふ歌を、千古の絶唱とほめあげてゐるのを見ると、詩眼の低劣にも驚くが、結局それは、詩歌の本當の味がわからんからなのです。

詩の味、歌の味は、容易にわからぬ。そればかりでなく、往往にして、邪道に陷り、墮落してしまふ。支那でもさうであるが、支那の影響で發達した日本の詩歌も同樣である。結構なものは少いのである。型だけ整つてゐればよいと思つてをる。

俳句の元祖は支那だといふ話がある。（これは何に出てゐるのか知らぬが、我々子供の頃に、よく話されたことで、山陽先生の塾だともいふ）

左傳、春秋左氏傳といふ本に（大凡二千三四百年も前に出來た本）讀みはじめのぢきの處に、

夏四月　ていはく　だんに　えんにかつ。

夏四月　鄭伯　克段　於鄢。

とある、「これだ」といふ。すると、そこにゐた他の一人が、俳句ばかりではない、和歌も元祖は經書にあるといつた。どこにあるかといふと、論語の憲問篇に、

しばぎうが、うれへていはく、人はみな、兄弟あれど、われひとりなし。

司馬牛憂曰　人皆　有兄弟　吾獨無。

これは冗談、戯れであつたが、形さへ出來てゐれば詩歌であるといふ考が、土臺になつてをる。

味ひといふものは、味つて見なければわからぬもので、説明解釋だけで滿足出來るものでない。それをよい加減に、形であるとか、色であるとか、かをりであるとかと、そのものの本質でない、屬性、つけ加はつたにすぎないものばかりを、力を盡して、一生懸命に、さがして見たところで本當のねうちは、わかるものではない。本當のねうちは「全」である。それを上面だけ見て、本當のうまみを、すて去つて、平氣でゐるのは、をかしいです。詩歌に對する、世間の人の考は、大抵はこれです。だから、愚にもつかぬものが、大手を揮つて、あるきまはつてゐます。

その味を味ふについて、まづ、修養といふと大げさですが、習熟、なれ親しむことが大切です。チーズなど、いや牛乳、トマトの類でも、食べない人がある。二三度食べて見ると、段段、すきになる。食べず嫌はこまるが、かすばかりたべて悅んでゐては更にこまる。

形や、色彩や、かをりや、調子や、それは、詩の味を助けるものではありますが、そればかりではだめなので、その本質、內容、思想が、外形と、どんなにうまく調和して、どんなにおいしくたべられるかが問題なのです。詩歌は外形ではありません。

稽古をする時、練習する時は、形を眞似、ことばをまね、寫生もし、剽竊も已むを得ませぬ

が、一人前と、自分でも思ひ、人も思ふ樣になり、新聞や雜誌に發表する樣になつたら、そんなことではいかんです。一體、二百か三百も作ると、もう作家氣取になる、その心持では、詩なぞわかるはずがありません。永久の精進、永久の努力です。眞似ではありません。個性の發揮です。獨創です。今の藝術界を見渡して見ますと、まねで終つてます。音樂でも、繪畫でも、書道でも、特に書家なぞは師匠のまねをするのが本色だと思つてゐます。笑ふべきです。詩歌の方では、小兒學語といつて、あかんぼが、おッかさんのまねをしてしやべりをする狀況です。もつと進まねばなりません。

習熟するといつたのは、よむことです、讀本讀詩です。まづ相當に、かなり澤山に、四角い字の本と、日本の古い本を見ることです。西洋流のものはいりません。が、見てもかまはん。多少の參考にはなる。社會、世間を見ることです。人情を知ることです。人情のない人に、詩はわかるはずが無い。

かうすればかう儲かるとか、何の爲になるとかと考へる人は、詩は味へません。藝術はそれ自身が目的で、何のためにではありません。宗教でも道德でも同樣のことです。外の物の爲に利用

すべきものではありません。言語教育に於て、根柢の思想と切離して、言語だけ教育しようとしてる人達及び漢學排斥を企てる人たちは詩のない人、情趣のない人です。わかる筈がありません。

詩の味歌の味は、酒を好み飲む人にはわかりません。煙草吸にはわかりません。酒氣のない時、煙草を吸はぬ時には少しはわかるかも知れません。痲痺された神經で何がわかりますか。酒や煙草の如き下等劣等な趣味に捕はれてゐるものには、わかるはずがありません。書物をよまぬ人、道德にとらはれてゐる人、宗教にとらはれてる人には、詩歌の味はわかりません。頭の融通のきかぬ人、氣のきかぬ人にはわかりません。美に拘はれてる人には、尙更わかりません。理窟で、理論で事をきめ樣といふ樣な單純な人にはわかりません。詩歌、藝術、宗教、道德は、大體理論から出發するものではありません。只、事實なのです。理論は、他人があとからこの事實に、勝手に與へたものです。事實として、考へて見る時、或る內容、思想、材料、形、色、調子などが、どの程度に整つてゐるかです。

此處に美しき技巧と、音樂的諧調とが認められなければなりませぬ。詩の味は、風韻です、神韻です、すぐれた面白味です。教育に應用されるのは、第二義的です。

廣道の　大き直みち　うばらしけり　雜草しげり　みたみら行かざり。

私は、詩の本道をゆけといふ。第一義に住せよといふ。本道は廣くして坦々として大道長安に通ずだ。邪徑旁岐も澤山ある。雜草の茂りふさがつてる小路を面白い近路と思つてはまちがひ。

詩歌藝術は徒黨を組んで我儘をすることではない。高尙な趣味を修養し理解することである。主義、理想、信仰、學問、人生である。先覺者の仕事である。特色、個性を發揮することである。物眞似ではない。創造である。

露骨、鄙陋はいかん。實感及び單なる寫生は、詩趣ではない。即興とか又は刹那の感じ、男女の癡情、淫猥なことば、それは詩ではない。囈語だ。駄洒落、言葉の上のたくらみ、いたづらは巫山戯です、惡戯です。藝術ではありませぬ。藝術として許されるとしても、極めて低級なものです。滑稽、諧謔、諷刺などは詩にならぬこともありませぬが、容易なことではありませぬ。十二分の努力を要します。「茶化す」世間を茶化して渡るのを、藝術、宗教、道德だと考へてる人もある。これも一種のまちがひ。茶化すなどは、世上の事だけでも不德である。況や藝術に於い

てをやである。藝術には自高我慢をきらふ。歌よみづらをするのは、よろしくない。まじめで、精進、努力がなければならぬ。喧嘩や、逸樂や、宣傳や、廣告は、詩歌でも、なんでもない。秩序禮節の無いものは、歌ではない。文法語法、風俗習慣を無視するものは、歌ではない。

わが歌は　わがにはあらず　神ながら　み神のむねの　血潮のひびきぞ。

我我作者（作家ではない。作家などいふ敬稱を、自分で使ふ樣な、僭上では、詩はわかりますまい）からいへば、私の歌は私の心です。胸のひびきです。私の生命です、私の日常です。私の音樂です。私の道德です。私の宗教です。そして絕えざる向上、絕えざる精進であります。死んでもやまない仕事です。私ばかりではない、すべての作者も、さうであらうと思ふ。

日本の歌の形は、色々ある。一番普通であり、ここでいはうといふのは、短歌で、所謂、五七、五七七、即ち三十一字、即ち所謂和歌であります。外の形のことは、今はやめておく。三十一字の短歌の元祖は、素戔嗚尊の「八雲だつ」といふことになつてをる。しかし、本當は、これは民謠風のものと見るべきです。『日本紀』に、

素戔嗚尊、自天而降到於出雲國簸之川上、……於彼處建宮。
やくもたつ　出雲八重垣　つまごめに　やへがき造る　その八重垣を。

とあります。これが歌の元祖といふのです。これよりも、私は、

崇神紀六十年の

「やくもたつ　いつもたけるが　はける大刀　つづらさはまき　さみなしにあはれ。」とある方が、面白いと思ふ。これも民謠風のものと考へてる。

神武天皇崩後、其庶兄當藝志美美命云云、伊須氣餘理比賣。
左章賀波與　くも立わたり　うねび山　この葉さやぎぬ　風吹かんとす。

又歌曰。

うねび山　ひるは雲とる　夕されば　かぜふかんとぞ　木の葉さやげる。

この御歌などは、雄健といふ部にはひるであらう、しッかりしたものである。

さて、私の母が私に子供の時、まづ教へてくれたのは、難波津のうた、淺香山のうたです。古今集の序にある

難波津の歌は帝の御始（オホンハジメ）なり、淺香山の言の葉は采女の戯よりよみて、このふた歌は歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人の始にもしける。

王仁が來朝して、仁德天皇の學問の御相手を申上げ、後、仁德天皇御即位の時、よんで奉つた、御代始めを祝ひ奉る歌といふことになつてる。

難波津に　さくや此の花　冬籠　今を春べと　咲くや此の花。

「淺香山」は萬葉第十六では、

右歌傳云。葛城王。遣于陸奥國之時。國司祇承緩怠異甚。於時。王意不悅。怒色顯面。雖設飲饌。不肯宴樂。於是前采女。風流娘子。左手捧觴。右手持水。擊之王膝。而詠此歌。爾乃王意解悅。樂飲終日。

右の歌は傳へいふ、葛城王（カヅラキノオホキミ）、陸奥國に遣はされし時、國司、祇承緩怠なること、異に甚し。時に王の意、悅ばず、怒の色面に顯はる。飲饌（ミアヘ）を設けたれども、肯へて宴樂せず。ここに前采女（サキノウネメ）あり、風流の娘子（ヲトメ）なり。左の手に觴を捧げ、右の手に水を持ち、王の膝を擊ちて、此の歌を詠みき。ここに乃ち王の意、解け悅びて、樂飲すること終日なりき。

とある歌。

淺香山　かげさへ見ゆる　山の井の　淺き心を　わがおもはなくに。

これが、『今昔物語』になると、歌のことばも少しかはつて來る。『大和物語』のは、『今昔』のものである。歌の心は、深く思ふといふことで、女子の心得としてある。

その次に、私の親が私に敎へてくれたと覺えてをるのは、

よそにのみ　見てややみなむ　葛城や　高間の山の　峯の白雲

これは、もと戀の歌と思ふが、學問志業にたとへて敎へられた。以上はみな結構なものとは申されません。

次に母が、最もよいものとして敎へてくれたものは、山部赤人の

神龜元年甲子冬十月五日幸于紀伊國時云云。

わかの浦に　汐滿ちくれば　潟を無み　あしべをさして　田鶴鳴き渡る。（萬葉第六）

でありました。しかし今の私は、萬葉第三の、高市連黑人の

櫻田へ　たづ鳴き渡る　あゆちがた　汐干にけらし　たづ鳴き渡る。

の方をよいと思ひます。高朗雄大、天空海闊の心持のするものである。一方は汐干で、一方は滿潮である。赤人の歌には、よせ來る潮の音が聞え、低く飛ぶ鶴の様が見える。黑人のでは、高く鳴きつつ飛ぶ鶴、青空、廣廣とした景色が見渡される。

が、さて、大體、短歌の形は、此の様なものです。第一句と第二句、五字七字が一連になり、第三第四と一連になり(五七)、第五の七が總括りの様に、引結んである。これも一つの形。所謂二句目で切れる二句切、三句目で切れる三句切、四句目で切れる(四句切といふか)ものもある。三句切で、「上の句」、「下の句」と兩斷する仕方は、あまり結構ではありません。以上、日本の短歌は、五句三十一字であることは、おわかりになつたはず。

漢詩の方でも、色色の形はあるが、普通、漢詩と言へば素人は、七言絶句のことと思ふ。七言絶句は、七字の句が四つあるので、即ち廿八字である。廿八字ではあるが、本當は、二十八個のことば(意味のある)が、一つにまとめられてゐるのである。和歌は三十一文字といふが、本當は、三十一の發音であつて、ことばの數は、かなり少い。

君が代は一語千代に二語八千代に三語さざれ石の四語いはほとなりて五語こけのむすまで六語

この歌を更にこまかくわけて、いはほと、なりて、こけの、むすまで として見ても、八語にしかならない。

高き屋に一上りて二見れば三煙たつ四民のかまどは五にぎはひにけり六

青丹吉し一奈良の都は二咲く花の三にほふが四ごとく五今六盛りなり七

五語か六語である。此の様に和歌の方は、漢詩よりも語數が少く、從つて思想がすくない。(で昔は、漢詩が貴ばれ、和歌はいやしめられた。女のいたづらとしてのみ考へられた。位。) それ故に、今も、漢詩とはちがつた扱方をせねばならぬことになる。そこで或は素朴單純をよしとする傾を生じ、中には單なる寫生に墮落したり、ただごと、新聞雜報になつてしまふ。で、大抵の人は立派な藝術的作品を示さうとはしないで、レッテラダモオレの道具に使つたり、玩具にしたり、ひまつぶしの器にしたりしてしまつた。內容は貧弱、又は空疏で、その本當の意味とは、遠く遠く懸けはなれたものとなつてしまつた。結局に漢詩に壓倒されて、創造の勇氣を失つた結果にすぎぬ。實をいへば漢詩と歌とは、その扱ふ內容的材料もちがふのである。

漢詩は、第一句第二句で、情、心持をいへば、第三句四句で、景、風景、景物をいふ、或は景

を先にし情を後にいふ。第一句にどういふことばが（思想が）あるから、それが、第三四句へどうあらはれねばならぬかと考へるのです。始めをかう、仕舞をかうと、面白くかなり澤山の思想をもり込むことも出來る。

七言絶句は唐の時代に印度の音樂の影響を受けて出來た形である。他國の音樂がその國の文學詩歌に影響することは、既に疑ひない事實である。處で此の七言絶句の形は、嚴肅な場合には使はない、たとへば勅題などに詠進することはない。

王維の元二の安西に使ひするを送る

渭城（地名）の朝の雨、輕塵をうるほす。客舍には青青として柳の色あらたなり。君に勸む、更に一杯の酒を盡せ。西（ニシノカタ）（の方）陽關（地名）を出でば故人なからむ。

渭城朝雨滚輕塵。客舍青青柳色新。勸君更盡一杯酒。西出陽關莫故人。

前の二句で、今別れんとする人を送てゆく春先の景をいふ。渭城の朝の雨は、春先の風にたつほこりをしめした。別れんとする酒場の前には、柳が青青と春らしい。あとの二句、もう容易に

知合にもあへまい、更に一杯を飲めといふのである。西の方の陽關の關所を出て、えびすの地に這入つたら、知合の人にもあふことはあるまい、せめて、もう一杯、盃を重ねなさいといふのである。いかにも送別の心持、西の夷地方へ使にゆく人を送る心持があらはれて、所謂愴然として涙落ちんとするものがあるのである。これをやけだといつた人がある。詩のわからぬ、ままこ根性の人である。さて、「陽關三疊の曲」、「渭城曲」、といはれるのはこれで、作後すぐ有名になつたもので、今でも送別の宴には、必ず歌はれる。

王翰の涼州詞

蒲桃（ブダウ）の美酒、夜光の杯（ハイ）。飲まんと欲すれば、琵琶、馬上に催す。醉うて沙場に臥す、君、笑ふことなかれ。古來、征戰、幾ばく人か回（カヘ）る。

蒲桃美酒夜光杯。欲飲琵琶馬上催。醉臥沙場君莫笑。古來征戰幾人回。

これもやけではない。さう見えれば、修養の足らぬことを反省するがよい。茶化したり駄洒落たり、又はやけ、くそやけは藝術ではない。只無信、不道德である。又、王之渙の涼州詞。

黄河、遠く上る白雲の間（カン）。一片の孤城、萬仞の山。羌笛、何ぞ楊柳を怨むるを須（モチ）るん。春光、

度らず玉門關。

黄河遠上白雲間。一片孤城萬仞山。羌笛何須怨楊柳。春光不度玉門關。

黄河に沿うて遠く白雲の間をゆく、一箇の離れ城（市街）が萬仞もあるかと思ふ山の上に見える。何と荒涼たる景色だこと。えびすが笛を吹く、その笛の曲は、楊柳怨だ。楊柳の曲など歌はんでもよい。玉門關から先きの夷の地方には、春は來ないときまつてる。どうせ年中寒冷な地方で、そして生命を投げ出して、君國の事にはたらいてるのだ。まことに、戰爭に苦しむ人たちの悲壯な感じがあらはれてる。

王昌齡の長信秋詞

帚を奉じて平明、金殿開く。且く團扇をもちて共に徘徊す。玉顏、及ばず寒鴉の色の、猶、昭陽（御殿の名）の日影を帶び來るに。

奉帚平明金殿開。且將團扇共徘徊。玉顏不及寒鴉色。猶帶昭陽日影來。

長信宮といふ御殿にをつて、君の寵愛が無くなつた婦人、班婕妤の心持を歌つたものである。夜明になれば御殿をあけるが、伴ふものは團扇だけである。扇は秋にすてられる。玉顏の色、（こ

の夫人）は、鴉にも及ばぬ。鴉は、昭陽宮の日影を受けて、うれしさうに見える。此方は常闇の悲しさである。怨をいはずに、怨があらはれ、悲をいはんで、悲が十分である。所謂、優柔婉麗、意味無窮である。

王昌齡の從軍行。

秦時の明月、漢時の關（秦の時、明月關といふ關所をおく、漢の時も亦おいた）。萬里長征の人いまだ還らず、ただ龍城（地名、塞外の地）の飛將をしてあらしめば、胡馬（えびすの人馬）をして陰山（陰山山脈地方をいふ）を度らしめじ。

秦時明月漢時關。萬里長征人未還。但使龍城飛將在。不敎胡馬度陰山。

李白の江陵を下る。（又は「早に白帝城を發す」とも題してある）

朝に辭す、白帝（地名、今の四川省奉節縣の東に在り）彩雲（曉の雲）の間。千里の江陵（地名）一日にして還る。兩岸の猿聲啼いてやまず。輕舟已に過ぐ萬重の山。（白帝より江陵に到る千二百里、兩岸皆山なり）

朝辭白帝彩雲間。千里江陵一日還。兩岸猿聲啼不住。輕舟已過萬重山。

李益の、夜、受降城に上つて笛を聞く。

回樂峰の前、沙（イサゴ）、月に似たり。受降城の外、月、霜の如し。知らず、何れの處にか蘆管を吹く、一夜、征人悉く鄕を望む。

回樂峰前沙似月。受降城外月如霜。不知何處吹蘆管。一夜征人悉望鄕。

劉禹錫（リウウシヤク）の石頭城。

山は故國をめぐつて周遭としてあり。潮は空城を打つて寂莫として回る。淮水東邊（ワイスヰトウヘン）（淮水の東の方）舊時の月。夜深けてまた女牆（ヒメガキ）を過ぎ來る。

山圍故國周遭在。潮打空城寂莫回。淮水東邊舊時月。夜深還過女牆來。

杜牧の秦淮に泊す。

煙（ケフリ）（モヤ）は寒水を籠め、月は沙をこむ。夜、秦淮に泊して（舟やどりして）酒家に近し。商女は知らず亡國の恨を、（後庭花の曲に亡國の恨あるのも知らずに）江を隔ててなほ唱ふ後庭（コウテイ）花。（曲の名）。

煙籠寒水月籠沙。夜泊秦淮近酒家。商女不知亡國恨。隔江猶唱後庭花。

七言絶句の形と、氣分とは、ほぼ、ぼんやりながら、わかつたらうと思ふ。日本の漢詩は、懷風藻といふ、奈良朝に出來た集が元祖であるが、かなり佳いものがある。一割以上ある。尊いものだ。平安朝はだめ、鎌倉足利はだめ、いや、多少はある。坊さんにある。德川期は無い。あつても、みんな附燒刄か、才人の詩かである。有名な「吉野三絶」の如きも、國體に相應せぬものである。明治へかけては、景氣がよささうで、實は不景氣であつた。大沼枕山の富士山の歌。

これ孝靈皇、第五年。名山、涌出す、駿中の天。玲瓏八朶、千秋の雪。照し到る紅洋黑漠の邊。

維孝靈皇第五年。名山湧出駿中天。玲瓏八朶千秋雪。照到紅洋黑漠邊。

人の詩歌を見るのには、それぞれの心得が要る。清朝で人の詩を選するに特別な伎倆、力量のあつた沈德潛（シントクセン）といふ人の言つたことばに

◉詩を讀む者は、心平かに、氣和ぎ、涵泳浸漬すれば、則ち意味自（ホ）ら出づ。よろしく自（ヒ）ら意見を立て勉强して合ふを求むべからず。

讀詩者。心平氣和。涵泳浸漬。則意味自出。不宜自立意見。勉强求合也。

◉淵明（昔の有名な詩人）の詩、胸次、浩然として（ひろく大きい）天眞、俗を絶す。當に、語言意象の外に於いて之を求むべし。

淵明詩。胸次浩然。天眞絶俗。當於語言意象外。求之。

◉詩は、法なかるべからず。亂雜にして章（文采）なきは、詩にあらざるなり。所謂、法とは、行かざるを得ざる所に行き、止らざるを得ざる所に止る。而して起伏、照應、承接、轉換、自ら、其の中に神明變化す。

詩不可無法。亂雜而無章。非詩也。所謂法者。行所不得不行。止所不得不止。而起伏照應。承接轉換。自神明變化于其中。

◉試に看よ。天地の間、水、流れて自ら行き、雲、生して自ら起る。何處にか、更に死法を著け得む。

試看天地間。水流自行。雲生自起。何處更著得死法。

◉詩はもと六藉の一、王者、これを以て民風を觀、得失を考ふ、豔情のために發するにあらず。

……唐末の香奩體、（韓偓といふ人のやつた、艶情、淫情を歌つたもの）抑又甚し。風人（詩人）を去ること遠し。

詩本六藉之一。王者以之。觀民風。考得失。非爲豔情發也。……而唐末香奩體。抑又甚矣。去風人遠矣。

他人の詩を看る仕方は、これでつきてるかと思ふ。宋の嚴滄浪といふ人のことばにそれ詩には、別材あり。書に關するにあらず。詩には別趣あり、理に關するにあらず。然れども、多く書を讀み、多く理を窮むるにあらずんば、則ち其の至りを極むる能はず。

夫詩有別材。非關書也。詩有別趣。非關理也。然非多讀書多窮理。則不能極其至。

論語の陽貨第十七には、

小子、何ぞ夫（カ）の詩を學ぶなき、詩は以て興すべく、以て觀るべく、以て群すべく、以て怨むべし。之を近（チカ）くしては父母に事（ツカ）うまつり、之を遠くしては君に事うまつり、多く鳥獸草木の名を知る。

小子何莫學夫詩、詩可以興、可以觀、可以群、可以怨、邇之事父母、遠之事君、多識於鳥獸草

木之名。

これは、詩經をさしたのであるが、詩歌の全體のことと見て差支ないものです。「歌は萬葉、詩は詩經、書は王羲之を手本にする」これは大內青巒先生の話。此の「手本」の意味は參考にする意味で、型にする意味ではない。極上を標準として、それよりもよくならうとするのである。

詩經大序

詩者志之所之也。在心爲志。發言爲詩。情動於中。而形於言。言之不足。故嗟嘆之。嗟嘆之不足。故永歌之。永歌之不足。不知手之舞足之蹈之也。」情發於聲。聲成文。謂之音。治世之音安以樂。其政和。亂世之音。怨以怒。其政乖。亡國之音。哀以思。其民困。故正得失。動天地感鬼神。莫近於詩。先王以是。經夫婦。成孝敬厚人倫。美敎化。移風俗云云。

詩經の大序

詩は志のゆく所なり。心に在るをば志と爲し(いひ)言に發するを詩となす。情、中に動いて、言にあらはる。之を言つて足らず、故に之を嗟嘆す。嗟嘆して足らず、故に之を永歌す。永歌して足らず、手の舞ひ、足の蹈むを知らざるなり。情、聲に發し、聲、文を成す。之を音と謂

ふ。(音樂、曲譜)治世の音は、安うして以て樂しむ。其の政は和ぐ。亂世の音は、怨んで以て怒る。其の政はそむく。亡國の音は、哀しんで以て思ふ。其の民は困しむ。故に、得失を正し、天地を動かし、鬼神を感ぜしむるは、詩より近きはなし。先王、これを以て夫婦を經し、孝敬を成し、人倫を厚くし、敎化を美にし、風俗を移す。云云。

詩は敎育に應用され得るものであるが、それは第二義的の方面である。『古今集』の序に、右の文を日本語に譯して

やまとうたは、人の心をたねとして、よろづのことのはとぞなれりける。よの中にある人、ことわさしけきものなれば、こころにおもふことをみるものきくものにつけて、いひいだせるなり。花になくうぐひす、みづにすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。ちからをもいれずしてあめつちをうごかし、めにみえぬおにがみをもあはれとおもはせ、をとこをみなのなかをもやはらげ、たけきもののふのこころをもなぐさむるはうたなり。……そもそもうたのさまむつなり。からのうたにもかくぞあるべき。そのむくさのひとつには、そへうた。おほささきのみかとをそへたてまつれるうた、なにはづにさくや

このはな冬こもり今ははるべとさくやこの花といへるなるべし。ふたつには、かそへうた。さくはなにおもひつくみのあちきなさみにいたつきのいるもしらずてといへるなるべし。みつには、なぞらへうた。きみにけさあしたのしものおきていなはこひしきことにきえやわたらむといへるなるべし。よつには、たとへうた。わかこひはよむともつきじありそうみのはまのまさごはよみつくすともといへるなるべし。いつつには、たたことうた。いつはりのなきよなりせはいかはかり人のことのはうれしからましといへるなるべし。むつには、いはひうた。このとのはむへもとみけりさき草のみつはよつはにとのつくりせりと、いへることのたくひなるべし。」

といつてをるのは、やせがまんらしくておもしろい。

書經といふ本の舜典といふ篇には、

詩は志を言ひ、歌は言を永うす。聲は永きに依り、律は聲を和す。八音よく諧うて、倫を（秩序）相奪ふことなければ、神と人と以て和ぐ。夔（人名）いはく、ああ、われ、石を擊ち石を拊てば、百獸、率ゐ舞ふ。

詩言志。歌永言。聲依永。律和聲。八音克諧。無相奪倫。神人以和。夔曰。於予。擊石拊石。百獸率舞。

これらは、詩といふものの根柢的思想で、藝術に對する最も進歩した考である。東洋では、一切を道德の根柢の上におくのである。美は即道德ではないが、道德に背いてゐるのは、斷じて美でない。美をつくし、又善を盡す、「盡美矣、亦盡善矣」である。特に音樂との關係までいつてをるのは、三千年も前のこととして實に尊いことである。

まづ此の樣なことで、詩歌の見分けをすれば、所謂妍醜分明である。流行的雜草をよろこんでゐるては、だめです。かりほろぼさねばだめです。讀者が十分見わけをして、惡劣な蔓草をきりすててゆかねば、よい詩歌はあらはれては來ません。よい詩歌の本當のものは、これからです。今までは、無かつたのです。努力しなければなりません。

さて、萬葉集は、支那の影響を多大に蒙つてる。善いものもあるが、くづも澤山ある。一體、文學書ではない。家持には詩はわからぬ。萬葉のうたは、長歌の方に特色があるので、短歌は數

は多いが、よいものは少い。それに比べると、同時代の懐風藻の方がしつかりしてゐる。撰者にも見識があり、意見もあり、詩もわかつてゐたらしく見える。

萬葉では、人丸の

淡路の　野島之崎の　濱風に　妹が結びし　紐吹き返す。

「溫柔敦厚は詩の敎也」で、含蓄があるをよしとする。人丸のうたを靜かによんでゐると、情景悠然として盡きざるものがある。

赤人のは、

若の浦に　潮みち來れば　潟をなみ　あしべをさして　田鶴鳴き渡る。

これもよい、これは長歌の反歌である。私はこれよりも、高市連黑人のを取る。

人丸は、歌のひじりといふが、長歌に於いて、非常な立派なものである。（支那の影響は十分ある）赤人は少し綺麗にすぎる。

赤人のに、

春の野に　すみれつみにと　來しわれぞ　野をなつかしみ　一夜ねにける。

と新古今らしいものがある。

高市連黑人

いそのさき　こぎたみゆけば　近江海　八十の湊に　たづさはになく。

長忌寸奥麻呂

くるしくも　ふり來る雨か　三輪か崎　さぬの渡に　家もあらなくに。

山上臣憶良のを二首

憶良等は　今はまからむ　子なくらむ　そもその母も　わを待つらむぞ。

士やも　空しかるべき　萬代に　語りつぐべき　名はたてずして。」

今年ゆく　新さきもりが　麻衣　肩のまよひは　たれか取り見む。（無名）

これは母のうただらう。いかにも感じがよい。

吾せ子を　大和へやると　佐夜ふけて　あかとき露に　わがたちぬれし。

これは、姉より弟への歌で、弟の行末を心配してゐる心持が見える。

靫かくる　伴の雄廣き　大伴に　國榮えむと　月は照るらし。

これは、近衛の兵士が月を見て、國家皇室を祝福したものである。

天平寶字元年十一月十八日於内裏肆宴歌二首

天地を　てらす日月の　きはみなく　あるべきものを　なにかおもはむ。

右一首　皇太子御歌（淳仁天皇）

いざ子ども　たはわざなせそ　天地の　かためし國ぞ　やまとしまねは。

右一首　内相藤原朝臣奏之。

萬葉集には、宗教的のものはないといふ。それは嘘ではない。しかし、四五首は、たしかにある。全然無いのではない。

元興寺法師自歎之歌

白珠は　人に知らえず　知らずともよし　知らずともよし　われし知れらば　知らずともよし。

大伴宿禰家持

度る日の　かげにきほひて　たづねてな　清きそのみち　またもあはむため。（來生値遇の大願である）

これだけでも宗教的のもののあることがわかる。

さて、平安朝に下つて、業平の歌も面白いと思ふ、これも母から、教へられました。

母みこ長岡にすみけり、業平宮づかへとて時時もえまかりとぶらはず、しはすばかりにとみの事とて文もてまうできたり、あけて見れは、

老いぬれば　さらぬわかれの　ありといへば　いよいよ見まく　ほしき君かな。

業平馬に急ぎのりて、なくなくかくぞ思ひける、

世の中に　さらぬわかれの　なくもがな　千代もと祈る　人の子のため。

此の歌を私の父が、その詠草の表紙だの、中だのに澤山かいてあるのを見て、私も度々涙を流したのです。

次に實朝卿のを教へられました。

山はさけ　海はあせなむ　世なりとも　君に二心　わがあらめやも。

箱根路を　わがこえくれば　伊豆の海や　沖の小島に　波のよるみゆ。

大海の　磯もとどろに　よする波　われてくだけて　さけてちるかも。

ときにより　すぐればたみの　なげきなり　八大龍王　雨やめたまへ。

先づ此の位にして、やめておく。萬葉中のよいものを、少々擧げたいとも思つたが、此の度は略する。但し、萬葉のぬきがき、唐詩のぬきがきをやつてをるから、その方で見て貰へば結構である。此の頃、良寛や子規が又とやかくいはれてをるやうだが、二人とも、馬鹿が多いには困ると、しかめつらをしてゐるだろ。

くまもなく　すめるこころの　かがやけば　わがひかりとや　月をもふらむ。

後をまたず　すみてぞいづる　夜半の月　いらむ時にも　てらさざらめや。

これは栂尾明惠上人の歌である。

私は、口語歌は、當然新詩形を取るべきだと思ふ。特に音樂的なるを要する。定型あるべからず。個々に作るべきである。藝術上の個性といふのは、その尊い特色である。自己本位、我利私欲のみ考へてる自稱藝術家もあるさうだが、それは藝術商人で、作者ではあるまい。いや、自ら作家などと敬稱を亂用するものには、詩歌の藝術はわかるはずがない。

わがうたは　地にわく泉　ときわかず　わきて溢れて　流れながるる。「わがうた千首」に題す

そくそくと　つかへば百年も　つかへる身　粗末にするな　惜しいいのちだ。

當來の　彌勒とはいはじ　今の世の　此の一瞬の　わが光り見よ。

一瞬は千年萬年の土臺である。積つて生命の長さとなる。わが光りは、人人各各、お互御自身の光りである。古溪のことを申すのみではありませぬ。さらば諸君。お互に努力しませう。

君がむねに　つたはりひびく　わがむねの　音よ　いのちよ　とはに榮えよ。

（昭和四年十一月、廣島放送局放送草案）

×　×　×　×　×　×

海の果　浪の果見よと　つかはしし　神は歸らず　波ただ白し。（石廊崎）

笹にふる　松にふる　このきりさめよ　うすらあかりよ　歌ひあかさむ。（即景）

二、歌の本道

昔、玉商がありました。大變美しい珠が見出されたので、これを立派な箱に入れて、或金持の處へ賣りに行きました。金持は澤山の金を與へて、それを購ひましたが、箱だけ取つて珠は返してやりました。此話は何を暗示して居るのでせう。支那に「畫に畫いた餅は食へぬ」と言ふ諺があります。幾ら立派に書いたとて、畫の餅は食べられません。御話を聽いた時、聽いたと云ふ丈のことでは何にもならぬ。その內容をしつかりと捕へなければならない。お餅は材料や方法や蒸方によつて味が善くもなれば惡くもなる。歌も多くの材料の中から選擇取捨して必要なものを取り、夫れを練り磨きをかける事が大切である。それには、本道をわすれてはいかぬ。大切なものを忘れてはいかぬ。

作文には三多と云つて、多讀、多作、多商量（批評）と云ふことがある。此は歌にもいはれる事である。此の三つの事を心掛けて居ると、何時の間にか深くなり、面白くなり、よい歌が出來て來る。歌を詠むと心に「ゆとり」を生じ、優美な性質を作り、行儀作法がよくなる。歌の本質

的の目的よりも、此のつけたりの方に善い事が澤山出來るのである。

（一）歌を作る心持

歌は、作らうと云ふ心持があれば、誰にでも作れるのである。

春の夜の　臺所にて　ゐんどうの　筋取り居れば　啼く時鳥。

と云ふのがあつた。これは十歳の女子の作である。又八歳の男子で

すみれ摘めば　すみれの香り　よもぎ摘めば　よもぎの香り　若菜摘みつつ。

と云ふのがあつて、大變面白いと思つた。又十二歳の男子で山王樣の豆撒に雪が降つた時の作に

雪つもる　山王の森　豆をまく　聲も今年は　少なかりけり。

と云ふのがあつた。同じく子供らしさがよく表はれて居る。

仄暗き　夕暮の道　傷つきし　子雀あはれ　雪降らんとす。

子供でこんなのはもう伸びない。子供は子供らしいのがよい。支那の七歳の女の子の詩に

別路雲初起（レヂニ メテリ）　離亭葉正飛（ニ ニ ノ）　所（ハスル）レ嗟人異（リ）レ雁（ニ）　不レ作二行歸一（ヲ）

と云ふのがあつた。これは約千百年前に、則天武后と云ふ女帝が愛して居た女の子（侍兒）に

「送ゝ兄」と題して即座に作らせたもので、兄を送る心持がよく現はれて居る。此の様に、歌はやれば出來るのである。出來ないのはやらないからである。

（二）歌の形

五七五七七である。五七で切るのを二句切れと云ひ、五七五で切るのを三句切れ、五七五七で切るのを四句切れと云ふ。三句切れは上句と下句に離れるから、さけるがよい。「古今集」の

袖ひぢて　結びし水の　凍れるを　春立つ今日の　風やとくらん。

は三句切れである。

年の内に　春は來にけり　一年を　去年とや云はむ　今年とや云はむ。

此は二句切れである。明治天皇の御製には二句切れが多いのである。

きまつた形は三十一字であるが、三十字、二十九字、三十六字位も古はあつた。けれど、今の私達が學ぶのには勝手なことをしてはいけない。三十一字に縛られる方がよい。昔からの規則に從ふのが第一である。

近代の歌に「口語の歌」があるがこれは無意味である。口語を使ふなら、三十一字と云ふ形を離れたものでなければいけない。三十一字を用ひるのなら古い言葉でなければいけない。三十一字の形は神代からあつたらしい。此の古い型に新しい言葉、新しい思想をもることは、面白くないのである。新らしい型が欲しいのである。（若い人達は口語の歌など作らなくてもよい。年を取つた本當の達人が、研究してくれればよいのである。）今の新しい歌や俳句は、邪道に陷つて居る。本道の正しい道は、古い道でなければならない。「最も新しい」ことは、「最も古い」ことであらねばならぬ。新體詩等もあるが、此は作つてもいいが、詩と云ふことは出來ない。詩は別にあるのである。

（三）歌の稽古

私達の心が、何か面白いと感ずれば、何か發音をする、言葉をいひ出す。感歎詞が言葉の初まりで、此が歌ふ様になると、それが歌である。歌には調子がある、音樂的要素がいる。歌は稽古を要する。私は、歌を一生涯稽古し努力するのである。永久の向上永久の精進である。私の死後殘るものがあるかも知れぬ、無いかも知れぬ。それで努力し稽古修養してをる。いや、多く作つても殘らない人もあり、不幸にして殘つて恥をさらす様なのもある。本當に歌人として世に立た

うとするものは、本當に歌といふものを知つて、善い物を作らねばならぬ。

歌には、實用と藝術との二種がある。實用の歌とは日記に書いたり、友達同志でやりとりしたりする、自分丈の歌、見たい同志の歌であり、他人に見せるのではない。人に見せ感心させるものは藝術の歌になる。學校では三十一字に馴らさせるのが本體で、その中に佳いのが出來れば結構である。歌を作つたり讀んだりして居ると、柔らか味を持ち、觀察注意の力が殖え、一切のものに同情心が出來、美しい心持になり、愉快の感を起すのである。音樂は「むねからむねへ」である。聲と聲とがよく調和し、心と心がふれ合つた時、眞の愉快を感ずる。歌でも、よく調和すると美しさ愉快さを感ずる。唱歌は教育上大切なものであるから、これを用ふれば中等學校の三年迄は修身はいらぬと思ふ。故に歌を強制的に作らせることも、いいことである。が、內容を豐富にし藝術的に充實する樣に心がけなければならぬ。

歌を作るには、先づ言葉遣ひに氣をつけなければいけない。歌は三十一字で大變言葉數が少いから頗る困難なのである。その、言葉遣ひを氣をつけるといふのは、ことばの洗鍊といふことである。ことばをえりわけ、みがきをかけることである。同じ意味のことばでも、或る場合に適不

適がある。否、使ひ所によつては、ねうちを殖すこともある。却つて價値をへらすこともある。或ることばは、此の場合にはよいが、此の場合には、意味不明に陷るといふこともある。戰爭に適するのもあれば、風月に適するのもあり、幾何學の證明にはなるが、おねだりにはならぬといふのもある。一首全體に、ひびきをあはせて、全體を一層美しくするもので、一語一語がなければならぬのである。そして、一首中、これ以上、どうすることも出來ぬ。即ち動かし得ざる調和を持つてゐるものでなければならぬ。奇麗な、纖細な、艶美な、或は淫靡なことばをならべさへすればよいのではない。無論、美しくなければならぬのだが、美しいだけでは何にもならぬ。內容とは何等の關係なく、ことばだけ兎や角論ずるのはまちがひである。內容と一致したことばを擇び取るのである。それには、ことばの意味、用法を十分、のみこまなければならぬ。勝手な我儘な、獨りぎめの考へはいかんのである。許容すべからざる罪惡である。幕末から明治へかけての漢詩の大家、大沼枕山翁のことばに、「詩に定法なし、意の屬する所。疎宕を要せず、精熟を要す。古ならず今ならず一家を成す。枯淡を骨となし菁華を肉。俯仰天地、皆新句。森羅萬象、才の具に供す。行雲流水、粘筆なく。生意活潑、眞趣を得ん。」とある。

一、同語（同字）をさけること。特に同じ「てにをは」はなるべく重ねないこと。

二、文法語法に氣を付けること。時の一致、條件の一致、自他の一致、其の他作文の規則を、同じ様に大切に考へること。條件とか時の一致とかが、讀む人に通じなければ歌を作るに損である。

三、其の上に美しさがそはなければならぬ。善眞美の三つの揃つて居るのが立派なのである。

四、漢字の字音をさけなければならぬ。歌は總て、ロォマ字で書いても分る様な、日本語を使はなければ駄目だ。漢字に振假名をつけるなどの馬鹿氣たことはするものでない。

五、歌の稽古には、平生の觀察注意思索が大切だ。山川風物、森羅萬象、細やかな所迄も注意する心掛は、作文を作り、歌を作るに大切なことである。

六、歌の見本。歌の大體の形を知るために、讀んで見る本は、先づ、萬葉集、古今集などである。古今を先によんで萬葉に行く。萬葉には、わからぬことばが澤山あるから、わからぬのはそのままにして、わかるのだけ讀めばよろしい。よんで鑑賞するのだ。新古今、實朝の金槐集や、西行の山家集等もよんでもよろしい。愚庵、良寛、元義、言道などにも一寸目を通すもよからう。但し、明治以後、現代人のものは決して模範としてはならぬ。それは、われわれの到達し得る程度のものである。我々はそれ以上に出なければならぬ。もつと立派なものを手本とするのだ。但し參考にする丈ならよろしい。參考に見るのなら、私の歌集でもかまはぬ。手本にして、私のまねなどすることは、けしからん。

（四）體制と神韻

歌を作るには色々の方面の書籍を讀んで、頭を作らねばならぬ。特に漢籍漢詩をよく讀むことだ。總て努力して養はなければならぬ。「體」といふのは體格及び禮儀秩序のことである。天子には天子の歌がある。女は女らしく、教員は教員らしく、商人は商人らしく、子供は子供らしく作らねばならぬ。身分を越え、禮を失つた、言葉遣ひのまちがつたものはいかぬ。人を送るには人を送るの型と禮儀がある。賀は賀らしく、悔みは悔みらしくせねばならぬ。古人に對する、今人に對する、目上に對する、同輩に對する、それぞれ禮式があるはず。

藝術は獨創である。人眞似ではない。不眞面目や小細工であつてはならぬ。落着いて、よく見つめて、美を見出す様に努力しなければならぬ。

歌は形だけではない。内容と外形とが調はなければならぬ。さて、古人は「歌は戀から」と云つた。是は本當であり又嘘である。伊太利のダンテは、ベアトリイチエと云ふ人を理想の美人とした。ダンテは健康、學問、優美等總ての善い德を、ベアトリイチエに持つて行つて理想とした。そこでベアトリイチエに對する考が根本となつて、彼の文學作品の上に、理想が現はれて居る。そして亡びざる光をもつてをる。然し總ての歌は「戀から」ではない。戀は劣情でもある。又「歌は眞心から」とも云ふ。然し歌はいつも「眞心から」出來るとばかりは云へない。僞善はいけないことであるが、又有効で、場合によつては必要である。眞心だけでは歌にはならぬ。方便が加はる必要もある。即ちかざりがゐるのである。又「歌は寫生から」とも云つて居る。歌は寫生であることもあるが、寫生の根柢に如何樣なる宇宙の大生命が含まれて居るかと云ふ所まで行かなければ眞の寫生の歌ではない。寫生だけで終つてるのは、歌でも何でもない。日本の繪畫に於ては、風韻神韻と云ふ事が言はれて居る。これは寫したものと自分との間に生命がふれあつて生きて居なければならぬ。一本の樅木を畫いても、それが伸び樣とする生命と宇宙の生命とが觸れ合つて居なければならぬ。歌は風韻神韻とか面白味とかを、土臺にしなければならぬ。又貫

之の云ふ「たゞごと」ではいけない。今日ではそれを「新聞雜報體」と云ふ。

春の日に　飛鳥の山に　來て見れば　櫻の花は　咲きにけるかな。（飛鳥山にて）

雨ふれば　淋しい夜なり　八時すぎ　九時すぎつひに　十時となりぬ。

こんなものが歌であつてはたまらぬ。

歌のよいねうちのあるのは、大勢の人が見て價値ありとするものでなければならぬ。然し大勢の人と云つても色々樣々である。自分のねうちは、年齡、趣味、境遇、教育の程度などの大體に同じ人にはよくわかるのである。處が、大勢の人に見せて、ねうちあると云ふことは大衆向ともなるので、一寸困ることである。大衆向は所謂下劣の詩魔で、實は墮落なのである。

（五）藝術の本意

藝術といふものは、或る技巧によつて、美しさを表はし、人に娯樂慰安などを與へるものである。どんな藝術でも、「美」がなければならぬ、そして、「眞」がなければならぬ。更に、「善」がなければならぬ。此の三つのものが、うまく調和し、融合してゐなければならぬ。從つて、指先、手先、口先でこね合せるものではない。玩弄品、遊戯物ではない。心から、胸の底から、涌

き出して來るものでなければならぬ。心の聲が全力を以て出て來る。これが歌である。歌は、人に見せるといふよりも、自分の尊い心持を言ひあらはさうと、作るのがよい。

最もよき藝術は、道德であり、宗教である。が、すべての藝術の根柢には、宗教がなければならぬ。それと同樣に、すべての藝術には音樂があつて、始めて潤ひを生ずる。歌も音樂を離れて考へることは出來ない。「藝術に國境なし」などと、變なことを言つて、人をごまかすものがある。それは、創作と流行とを混同してごまかすのである。流行し鑑賞するのには、國境はない。しかし、創作といふことは、國境があるによつて出來るのである。創作は個性による。個性は、民族、風土、地方の影響なしに有るはずがない。家風のない家庭、校風のない學校、國風のない國家、我々には考へられない。藝術といふもの、即ち內容と形式とが一致調和してゐる藝術といふものが、國家、民族の背景なしに作られるとは、我々には考へられぬ。宗教、信仰に於いても、それが國家の外にありうるとは、思はれぬ。國家といふことは、思考の第一歩に於いて、已に除外出來ぬことである。猶太教は、猶太民族を背景として成立し、基督教は、その國家民族を背景として發達し、支那の儒教は支那民族が背景になつてゐる。日本の佛教は、印度の佛教では

ない。日本に於いて、國家民族に適合する樣に、改善發達した所謂日本佛教である。猶太民族を離れて、猶太教は考へられぬ、日本民族なしに日本の佛教は考へられぬ。日本の歌を作るのには、日本の國家、國情、日本の民族、民族性が、背景とならなければならぬ。藝術は國境あるによつて、價値あるのである。國境なき宗教は、空言放論にすぎない。

藝術は、もつと通俗的、大衆的にならねばならぬといふ話もある。しかし、藝術が、實感を離れる必要がある以上、本質的に大衆的にはなり得ぬものである。藝術が、多少なりとも修養を要する以上、通俗的にはなり得ぬものである。この話も、藝術を墮落させ、宗教を墮落させようとする運動の一つであるだけのこと。そして、これは、創作するものと、鑑賞するものとの異る立場を混同して考へさせやうといふのである。これは一種の罪惡である。

又、我が國體に背くもの、善良なる風俗習慣を破壞に導く樣にするのを、藝術と考へてる愚人もある。これは藝術でもなければ、宗教でもない。一種の迷信であり、邪信である。又その人はマニアである。我我は、穩健中正、日日の改善、日日の進歩、向上を圖ればよいので、先覺者を以て任じ、他國と自國、他人と自分、個と全との關係を明に見てをらねばならぬ。社會性のまる

でちがつてる餘處の國國の眞似をするのをよいと思つてるのなどは、實にけしからんことである。いや藝術も詩もわからぬ人たちである。

歌に宗教的情味の尊いことは、蓮月尼の歌が尊ばれ、伊藤左千夫の歌が今でも大切がられてるのでわかる。共にそれほど上等のものではないが、そこに、一脉、宗教的情味が含まれてをるから、今でも人にもてはやされてるのである。

(六) 新しい

藝術は新しくなければいかぬといふ。新しいとは何ぞや、歴史や習慣や、舊文明を無視することではない。又突飛な事を云ふのではない。古い歴史から生れて來たのが、新しいと云ふ事なので、舊精神が再び起つて來たのを云ふ。深き內省によつて、舊精神の復興をいふのである。今日日本の國民教育が盛んになつて來たのは、神武の御代に復らうとするのである。佛教は突然出たのではない、婆羅門教の中から、尊い精神が復興したのである。最も古くて、最も新しいものは日月である。日月は終古常に見ゆれども、その光景常に新なり、「日月終古常見。其光景常新。」である。うッかり人の突飛な流行を眞似するのはよくない。藝術は流行を嫌ふ。人眞似の信仰、

人まねの藝術は、信仰を毒し、藝術を害し、人を毒し、民族を害し、國家を賊するものである。齋藤茂吉が歌を三行にかけば、主義も考もなく、すぐと自分も三行にかく。藤原義江の聲が綺麗だといふと、蓄音器でまねをして、變なこゑを出す。「小鮒の腹白く光る」といへば秋の鮒も腹が白いと思つてる。歌でも何でもない。

(七) 個性

それから自己と云ふものを忘れてはならぬ。自分の個性を大切にせねばならぬ。自分は自分で始末しなければならぬ。大宇宙の大きな中に、小さな自分が存在して居る。自分の小さな中に宇宙の大きなものが含まれてゐる。全の中の個である。全を離れては個は存在しない。しかし個の特色がなければ、全も亦特色のないものになる。個が集つただけでは全にはならぬ。個としての特色があり、又別に全としての特色がある。全はただ個を集め加へ合せただけではない。この兩方をどんなに結び付けるか、そこに藝術がある。藝術の個性尊重がある。自分の特色を發揮することが大切である。世間並になる事は大切ではない。自分の歌に特色がある。力强さに於て、音樂的に於て、その他に於て、特色があるといふことにならねばだめだ。歌は歌だけで濟むもので

はない。歌は生活の小さな部分で、これがすべての生活に、うるほひ、美しさを與へる。これは唱歌とか繪畫とかの藝術と同樣な事である。

（八）藝術は努力

自分が歌が上手であるとほめられても、慢心してはいけない。二百や三百首位で、自分だけえらくなつてはいけない。努力して規則に從はなければならぬ。藝術に黨派があつてはならぬ。アララギ派、明星派、何派何派、ねごとのけいこに外ならぬ。歌は實修實行である。日日の生活であり、日日の修養であり、日日の事實である。理窟ではない。藝術を理窟から考へやうといふのは邪道である。女性はうぬぼれで、移り氣で、嫉妬心が强く、獨創の心がない。これはいけないことだが、よいことだ。嫉妬はするがよい、そこに向上心がある。うぬぼれもよい。同情心があれば更によい。自他の區別が明になつて、物眞似はせぬだらう。移り氣もよい。根柢に努力がいる。惡をすて、善に移ることが出來る。獨創がないのは困る。流行を追ふばかりではいかぬ。つまり女子の惡德を善德に化する樣に勉めるのだ。いや、惡德はとりもなほさず善德である。藝術は畢竟、永久の努力、精進である。小我、小成に安んじては、何も出來ない。修養のない藝術なぞは、あるはずがない。「豈、天然の彌勒、自然の釋迦あらんや」である。

（九）むすび

藝術は人生を美しくし、世の中を立派にする。世の中を立派にして行くには、藝術や歌だけが大切なのではない、人としての立派さも必要である。君たちがベアトリイチェの如く、神の美しさ、氣高い人格を持つと自分で思ひ得たなら、どんなものでせう。又、白鳩の如く動物的な美しさで滿足するか。それは皆樣の考次第である。君たちは、將來特色ある、日本文明を更に立派にしてゆくことについて實力と可能と責任とを有つてをるものである。東西の文明を融合し、新なる日本文明を創造して、世界文明を指導すべき重大な責任を有つてをるのである。歌の本道といふのはかういふのである。此の意味に於いて、歌の藝術についても、本當のものを、立派にやつて貰ひたいものである。

（愛媛縣立松山高等女學校校友會にて、筆記者　高橋美惠子）

三、歌の嚴肅性

言語と思想とを材料にするところの歌といふ藝術は、全然、大衆的でない。大衆的であつてはならぬものである。他の繪畫や音樂などと同じ樣に、作者にも鑑賞者にも、慰藉と愉悅とを與ふるものではあるが、遊戯氣分、娯樂氣分のみではない。

東洋に於いては、あらゆる藝術が、みな道德的根柢にたつべきことを要求する。道德の鼓吹宣傳をする道具といふわけではなく、道德に關係なしには居られぬといふのである。それが行きすぎると、道德を鼓吹する道具としてその價値を論ぜられるやうになつて、間違を生ずる。又藝術の社會的價値が考へられなければならぬところから、遂には、教育に應用されるものでなければならぬとせられ、藝術は、同時に教育であり、藝術家は同時に教育家であり、其の作品は教科書たる價値を有せねばならぬことになつてしまつてゐた。これは、藝術の本質を考へさへすれば、すぐ、それが見當違ひであることがわかるのだが、藝術の社會性といふものを認め、かつそれを

要求するところから、かやうになつた次第であつた。藝術は、もとより道德でもなければ、教育でもない。けれども、無道德、非教育、非社會的であるのがよいとか、さうでなければならぬとかいふのではない。ただ、道德とか教育とかいふことばが、正しい意味で了解されれば、藝術とは、切つても切れぬ因緣關係のあるものであることも、すぐわかるはずなのである。

詩歌の藝術に於いては、無論、娯樂、遊戯の氣分が無いわけにはゆかぬ。又、滑稽味、諷刺は亦本より妨げぬところではあるが、强さがすぎると、詩ではなくなる。いやみになり、惡口になり、皮肉になり、嘲罵譏謗になる。これは避けなければならぬ。道德の唱導や教訓といふ樣なものは、藝術でないのであるから、道歌などは排斥される。從つて小理窟、說明にすぎないものは形は歌であつても、內容は歌ではないのである。「宋に詩なし」といふのは、此の意味である。地口、駄洒落、刹那の小景、肉欲のうた、寫生だけのものなぞは、床間と便所とを取違へたものだ。人間、茶目氣分はなければならぬが、茶化したり、ひやかしたり、道化たりするのは、よろしくない。不德だ。以上の意味に於いて、今の世、否、古來和歌、俳句、漢詩、新體詩等に、少からず邪道にふみこんでゐるものが多いことを御承知ありたい。物まねが多く、眞面目のものが

少いのは殘念である。廣告や宣傳用に藝術を利用することは、罪惡である。藝術は何かに利用されるはずもなく、利用してはならぬものである。利用した藝術は、已にその價値を失つたものである。主義、理想を失つたり、實行の力を闕如したり、公然と舊道德に反抗する勇氣も信念もなく、己が無秩序不德を、何とか理窟づけ、ごまかさうとする「てれがくし」、「いひぬけ」、「ごまかし」、「さとりづら」、「野狐禪」これが「茶化」となるのである。最も社會人生を毒するものである。

三並良先生と話したことであるが、三並先生の意見に、日本の文學にはまじめなものが無い。特に萬葉などには宗教的のものが無いのはつまらぬとあつた。私はさうも思はぬが、宗教情味の欠乏は事實である。萬葉集中、實をいへば、僅か五六首位あるだけである。左千夫などが、今以てとやかくいはれてをるのは、新佛教徒の一人で、新しい信仰を有つてをつて、その作品に多少宗教的情味があるからである。

うたに宗教的のものが少いといふことは、即ち歌に嚴肅味が無いといふことである。この嚴肅といふことは、歌の一つの方面でなければならぬのだが、まづ、あまり人に考へられてゐなかつ

た、殆ど、無いといつてよい狀態である。歌に對して本家的影響を與へた支那の詩文には、相當嚴肅氣分のものがあるのである。日本の古來の歌に、（漢詩でも新詩でも）此の嚴肅がなくて、浮調子の、道化半分、茶化し半分のものが多いといふことは、即ち日本人が、文學藝術を第二義的にのみ考へて、本當の了解がついてゐなかつたのだといふことになる。まことに殘念な次第。漢字を澤山つかひ、漢文風な言ひ方、漢文直譯流の言ひ方をすれば、それが嚴肅だと考へてゐる人が澤山あつたが、いふまでもなく大まちがひ。形式と內容、言語と文字、言語と思想との相關理法を了解し得ぬ人たちである。

處で、藝術といふものは、必ず嚴肅味を有つてをらねばならぬはずである。如何なる場合にも、自然備はつて來るはずである。滑稽の場合にも、諷刺の場合にも、この嚴肅性が、その根柢をなしてをることによつてのみ、有効に成功するのである。嚴肅性のない滑稽、諷刺は、江戸人の駄洒落、癪、皮肉にすらなり得ない。「痰一斗へちまの水もまにあはず」、「塚も動けわが泣く聲は秋の風」、「木曾殿と背中合せの寒さかな」、「行水のすてどころなし蟲の聲」、「朝顏につるべとられて貰ひ水」、「泣くな泣くな　おれは死んでも　滅びない　いのちおまへの　胸に生きて

る」。實に嚴肅なものである。有名な繪畫、彫刻、書、みな嚴肅性にみちてをる。王右軍以下顏魯公にしろ、褚河南にしろ、蘇東坡にしろ、人に尊敬され、崇拜されてるものは、みな嚴肅性が十分である。法隆寺の壁畫を見ても、密陀繪を見ても、正倉院御物の繪畫圖案を見ても、同じ樣に感受し得られる。特に奈良朝の彫刻藝術、佛像、天部等を見ても、我我は、その嚴肅性に、何ともいはれぬ衝擊を受ける。そして、自然に頭がさがる。奈良藥師寺金堂の藥師如來を見て、頭のさがらぬ人はあるまい。私は、ほんとに涙が流れた。これはその嚴肅性にうたれたのである。鎌倉の大佛に對しても、同樣の感じを受取る。然るを、「美男におはす」などと、肉欲感を附加して、自ら慰めようとした婦人があつたが、これは、一種の色情狂で、藝術の嚴肅性を解し得ぬ人であつた。藝術の永久性といふものは、嚴肅性からのみ派生して來るものである。嚴肅性の足りぬものは、一時はもてはやされても、ずんずん滅び去つてしまふものである。この事は明治以後、我々の見得た、小說、劇、歌、小唄等にでも、十分言ひ得るのである。

藝術の嚴肅性は、常に、宗教的情味、道學的意識を伴つてゐる。その作者の、宇宙觀、人生觀、又はその信仰及び人格が、作品の上にあらはれるのであるから、その作品の、品位、風韻、價値

すべてが、最高の位置に於いて批評される。そして、その作品には、宗教的、道德的情味が、十分に含蓄され、表示される。そして嚴肅な氣分が人に迫る。處が、第二義的に、或はその副產として、宗教的、道德的、教訓的に傾いてしまふと、歌の方では、道歌といふものになる。道歌といふものは、歌藝術としての本質を失つた副產物製作に努力したものであるから、ねうちがない、まちがひだといはれるのである。利用的立場に墮在せしめられてゐるからである。

此の樣に、歌藝術の嚴肅性が、第二義的に、副次的に取扱はれると、道德的、教訓的になる。時には、道德的意味を、ふんだんに有つて、思ふ存分、それを說明してゐる樣なものでも、相當藝術品として許容される場合もあるであらう。それは、その嚴肅性のあらはれ（潛在でも）が有力に働くからであらう。『君が代』なぞも、その一例であらう。今日でも、藝術といふよりも、第二義的のものに取扱はれて、　天皇を讃美し奉り、國家を祝福するといふ場合にのみ使用されてをる。そして、その意味に適合する樣に、特に音樂が伴はせられてある。其の原歌も、その音樂も相當、藝術品として價値あるものであるが、その意味は、大抵忘れられてをる。音樂演奏會などで、四重音を以て演奏する場合に於いても、大抵は、藝術としては扱はれないで、　天皇に

對して敬意を表し奉ると、同じ程度の敬意を以て、歌隊は歌ひ、聽者は起立拜聽するのである。慰藉、娯樂は超越してしまつてをる。そして、回向祈禱、報恩謝德の情感に燃える。嚴肅が宗教的道德的又は民族的に、その本質を變へたので、一つの尊い藝術の現象であるのである。藝術が直ちに宗教になつたのである。これは我が國にのみ限つたことではない、東洋、西洋の諸國の「國歌」に於いて、みな同樣にあり得る、實在してゐることであるのである。

萬葉に宗教的の歌がないといふことは、少在屬無の說であつて、五六首位はあるだらう。前にもいつたが、少しと雖も、あることは有る。それは嚴肅であるから、調子が浮調子ではない。おちついてをる。所謂沈着である。（これをはき損つて、君が代をあまりに緩く間のびに歌ふのは失態だ）「元興寺の法師の自嘆の歌」、家持の數首などである。金槐集や山家集にも多少はあるかと思ふ。明惠上人のにもあつたらう。なににしても、一等嚴肅なものは、例の奈良藥師寺の「恭佛跡歌碑」の歌である。その調子ひびきといひ、そのことばといひ、その句數といひ、その思想といひ、實に嚴肅なものであつて、奈良の彫刻などと同じく、藝術の嚴肅性を十分に示してをるものである。（但し、歌碑は、平安初期のものだと、思ふ。）が、これを滑稽趣味な歌の形に借りてみたり、或は男女の癡情をあらはしあふに借りて見たりした人があつたが、その愚は及ぶべからざるものである。又、『法王帝說』にある、巨勢三杖の太子樣を追慕した歌なども、隨分意味深いものである。

いかるがの　とみのをがはの　たえばこそ　わがおほきみの　み名忘らえめ。

餘論になるが、學校の校歌、組合とか團體とかの會歌、團歌の如きも、君が代と同樣の性質意味合のものでなければならぬと思ふ。校歌は、その校の精神理想を高調すべきものであるから、粗末に、いたづら（戯）にすべきではない。扱ひ方も、嚴肅莊重でなければならぬ。應援、集會、娯樂などに流用してはならぬ。いや、流用出來るはずのものではない。私は、四大節等の式には、四大節等の歌を必ず國民全體が歌ひ、式の終りに於いて、學校等に於いては、必ずその校歌を歌はしむべきものだと考へてをる。

校歌は、歌としての文學藝術から見ても、歌ふものとしての音樂藝術から見ても、高尙で、優美で、力あるものでありたいと、私は考へてをる。もとより、第二義的のものではあるが、德目の羅列と地名の詠み込みとだけではつまらぬと思ふ。結局、校（又は團體）の精神理想、及び國

家の理想を、最もよく呑み込ませるものでなければならぬ。

歌藝術の嚴肅性を考へると同時に、歌を作る場合に於いても、嚴肅な心境を以て、取扱ふべきであると思ふ。「詩之大概有レ二。曰。優游不迫。曰。沈著痛快。」（嚴滄浪）言ひ得て我が意を獲たりである。

（松山高等學校校友會雜誌第十二號補訂）

× × × × ×

わがうた宣言

本道チュウ。第一義ニ住セヨ。コレ第一宣言ナリ。

藝術ハ趣味ナリ、主義ナリ、理想ナリ、道德ナリ、信仰ナリ。而シテ學問修行ナリ。而シテ人生ナリ。我等ハカクノ如ク信ズ。

露骨鄙陋ハ我等ノ取ラザルトコロ。實感ハ詩趣ニアラズ、即興ハ囈語ノミ。和歌ハ戲曲小說ト異ル宜シク格調高古、神韻縹渺タルベキナリ。

藝術ニハ自高我慢ヲ忌ム。和歌ノ師資相承ヲ尊ビシハコレニヨルナリ。我等ハ己ヲ空シクシテ他ニ從ヒ、以テ增益ヲ得ルヲ圖ルベキナリ。

四時ノ運行ハ必ズ序ニヨル。人ノ行ヒ人ノ心ニ禮節秩序存セザルニ至レバ、人類的棲息ハ破滅セザルヲ得ズ。蓋シ秩序禮節ハ人ノ本能ナリ。

古溪小篇既刊目錄

第一　ハナシコトバ十七條憲法
第二　わたしはだれ
第三　天壤無窮

昭和六年八月三十日印刷　定價一部金拾五錢
昭和六年九月二日發行
編輯兼發行人　林竹次郎
印刷人　山名貞雄
東京市本郷區駒込蓬萊町三
印刷所　盛明舍
東京市外瀧野川町田端一〇五
發行所　古溪歌會
振替口座東京七五九五三

終